

# 湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

## 妊孕性温存に関するカウンセリングを受けた若年乳がん女性の体験に関する研究

慶應義塾大学看護医療学部 准教授 矢ヶ崎香

### 1. 研究の背景

がん治療を受ける若年乳がん女性にとって妊孕性の問題は重大である。若年乳がん女性に対する化学療法やホルモン療法は、性腺機能不全、早発閉経などをもたらし、妊孕性に影響を及ぼす可能性がある。そのため、これらの治療によって将来の妊娠の可能性を失わないように生殖機能を温存する「妊孕性温存」が推奨されている。

若年乳がん女性に限られた期間にがん治療や妊孕性に関する複雑な意思決定が求められるため、医療者による質の高いカウンセリングの提供は不可欠である。しかしながら、日本においては若年乳がん女性の妊孕性温存に関する標準的なケアは依然として整っておらず、各施設の努力に委ねられているのが現状である。今後、日本における妊孕性温存に関するケアアプローチを検討するには、これらのカウンセリングを受けた乳がん女性がどのようなニーズや課題を抱えているのか、医療者にどのような支援を求めているのか、当事者の視点から事象を理解することが不可欠である。したがって、本研究は妊孕性温存に関するカウンセリングを受けた乳がん女性がどのような体験をしているのか、また医療者に対してどのようなニーズがあるのかを探求することを目的とした。

### 2. 研究方法

1) 研究デザイン：半構造化面接法による質的研究とした。

2) 研究協力者:乳がん診断後、妊孕性に関するカウンセリングを受けた者を対象とし、聴覚障害や認知障害がなく、言語的コミュニケーションが可能で、本研究の協力に同意が得られた者とした。身体的な強い不快感や、精神的に強い不安や強い抑うつ等の苦痛がある者や研究参加による負担があると医師が判断した者は除外した。

3) データ収集と分析方法

(1) 調査期間：2016年4月－8月

(2) 研究協力候補者はA病院で妊孕性に関するカウンセリングを受けた患者のリストから、担当医が研究参加可能と判断した者を候補者として選定した。

(3) データ収集は、研究協力候補者が来院した際に、文書を用いて研究概要を説明し、同意が得られた患者に、研究者は面接（インタビュー）を行った。面接場所は研究参加者が自由に語り、プライバシーの保護が厳守できる、個室の環境（研究施設の診察室もしくは本学看護医療学部の会議室など）を研究協力候補者に選択してもらった。データ収集は、半構造化質問紙を用いて、個別インタビューを行い、語られた内容はICレコーダー

に録音した。インタビューガイドは、a)がんの治療と共に妊娠の可能性を温存するために医療者（医師、看護師）からどのような情報や相談、支援を受けましたか。その時の様子やお考え、気持ちをお話し頂けますか。b)医療者からの情報、相談、支援を通して考えたことや感じたことはどのようなことでしたか？その過程で考えたこと、悩んだことあるいはよかったことなどを教えて下さい、などと尋ねた。録音したデータは逐語録に起こし、質的分析を行い、またデータはNVivo®ソフトウェアを用いて管理をした。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、看護医療学部倫理委員会（No.240）、および調査施設の研究倫理委員会（15-R063）の審査で承認を得て行った。本研究は、乳がん患者の妊孕性に関わる内容をインタビューするため、研究参加への任意性、自主性を重んじて実施した。得られた情報は個人が特定できないよう匿名化し、電子データの保存は厳重に管理した。

### 4. 結果

乳がん女性の参加者は11名で、平均年齢41.2歳（33-46歳）、診断から平均3.6年目（2-6年目）であった。分析の結果、コアカテゴリーとして〈Certainty と Uncertainty の下での妊孕性の意思決定〉が導かれた。妊孕性に関する意思決定は、妊孕性に関するカウンセリングを受けた女性は自身が挙児を望むか、どのような人生を望むのかなど〈Personal values/preferences〉を内省することから意思決定が始まっていた。そして、がんや妊孕性に関する治療選択の時だけでなく、数年経過している状況でも〈Certainty〉と〈Uncertainty〉の間で葛藤しつつ、妊孕性に関する意思決定を繰り返していることが示された。〈Certainty〉には「Information」と「Emotional support」が含まれ、一方の〈Uncertainty〉には「Time constraints」「Recurrent risk」「Labeling」「Unmet needs」が含まれたように、乳がん女性は妊孕性の課題に関して Certainty の要素よりも Uncertainty の要素を多く抱え、ストレスフルな状況で難しい選択を繰り返していた。

### 5. 結論

乳がん女性に対して個々のニーズに応じた情報はがん医療と生殖医療に関する協働によって女性に提供されるべきである。さらに、医療者は、妊孕性に関する課題に対する繰り返す意思決定において、女性たちが希望を持ち、前に進むことができるよう支援すべきである。

### 6. 謝辞

本研究にご協力を下さった皆様に心より感謝申し上げます。また本研究は、湘南藤沢学会研究助成基金により実施することができました。心より感謝申し上げます。

研究成果は学会発表および国際雑誌への投稿を予定しています。